

第十二章

ゴドウィン氏の、人間の寿命が無期限に延びうるという推測——精神的刺激が人体に及ぼす作用から誤った結論を引き出すことの不当さを、いくつかの事例で示す——過去の兆候に拠らない推測は、哲学的推測とは言えない——地上で人間が不死に近づくという点についてのゴドウィン氏とコンドルセ氏の推測は、懐疑論の不整合を示す興味深い一例

ゴドウィン氏の「人類は地上で不死に近づく」という見解は、人口原理を根拠に自らの平等制度への異論を退けようとする主張を述べた一章の中に収められているが、その配置は適切とはいえない。男女間の性欲が寿命の延長よりも速いペースで弱まるという前提を置かないかぎり、地球はかつてないほどの過密状態に陥るだろう。とはいえ、この問題はひとまず氏に委ね、ここでは不死の可能性を支える根拠として挙げられているいくつかの現象を検討することにした。

心が身体に及ぼす力を示すため、ゴドウィン氏はいくつかの事実と具体例を挙げてい

る。一つの朗報によって病の心配が引き、症状が和らぐことは少なくない。怠けがちな人にとって、不運や災難は病の火種や原因になりがちだが、忙しく精神的に動く人にとってそれらは、忘れ去られ、しばしばはねのけられ、ついには克服されてしまう。気乗りしないまま、しかも決めかねながら二十マイル歩けば、ひどく疲れ切ってしまうだろう。だが、情熱や圧倒的な動機、あるいは我を忘れさせるほど強い目的に突き動かされて同じ二十マイルを歩けば、出発時とほとんど変わらないほど爽快で軽やかな状態のまま到着することもある。予期せぬ一言や一通の手紙が呼び起こす感情は、血の巡りを速め、心臓を高鳴らせ、舌をもつれさせたり、言葉を失わせたりするなど、身体に顕著な変化をもたらす。極端な苦悩や歓喜が死を招いた例も知られている。心の力や作用が回復を助け、ときにはそれを遅らせることを、医師ほどよく理解している者はいない。

ここで挙げられている事例の多くは、精神的な刺激が身体に及ぼす影響を示している。心身の結びつきがきわめて密接でありながら、なお不可解な点が多いことは、ほとんど疑いようがない。とはいえ、同じ強さの刺激が途切れることなく与えられ続ける、あるいは仮に一時的にはそうなりうるとしても、受け手を疲弊させることはないと考えるのは、刺激そのものの性質を理解していない証拠である。いくつかの例では、その強さは

新奇さや意外性に依存している。この種の刺激は、その性質上、同じ効果を繰り返して再現することはできない。繰り返せば繰り返すほど、その強さの源である新奇さが失われていくからである。

別の事例では、小さく限定された作用や部分的な効果から、安易に大きく一般的な効果へと話を拡張してしまっている。このやり方が誤りであることは、数えきれないほど多くの場面で示されてきた。たしかに、忙しく活動的な人は、他に気を取られるものがない人であれば気にかけるような軽い体調不良を、多少は紛らわせたり、そもそも気にしなかったりすることがあるだろう。しかし、だからといって、精神の活発さによって高熱や天然痘、ペストといった病まで、まるごと無視できるということにはならない。

圧倒的な動機に突き動かされれば、人は二十マイル歩いて引き返してきても、軽い疲れなど気にもとめないだろう。しかし、その動機を倍にしてさらに二十マイル、四倍にして三度目の二十マイルと距離を重ねていけば、どこまで行けるかを最終的に決めるのは精神ではなく筋力である。十ギニーの報いを目の前にしたパウエルの方が、五十万ポンドを動機とするゴドウィン氏よりも遠くまで歩いたかもしれない。非常に強い動機が、並みの体格の人に働いたとしても、無理がたたって命を縮めることはあっても、二十四

時間で百マイルに達することはないだろう。したがって、最初の二十マイルを歩いたときに外見上は疲れていない、あるいは本人の自覚が薄いからといって、実際に疲れていないと結論づけるのは誤りである。人は同時に複数の対象に強い注意を向け続けることはできない。二万ポンドのことが頭の中を占めていれば、足の軽い痛みや手足のこわばりは、単に意識から外れているだけである。もし本当に出発時と同じだけ新鮮で軽快な状態にとどまっているのなら、第二、第三の二十マイルも第一と同じようにたやすく歩けるはずだが、そのような結論は明らかに不合理である。気性の激しい馬は、すでにかなり疲れていても、拍車の刺激やハミさばきに応じて奮い立ち、周囲の目には走り始めたばかりのように元氣に見えることがあり、馬自身も興奮している間は疲れを感じないかもしれない。だが、この見かけだけから、「刺激を与え続ければ馬は決して疲れない」と論じるのは、理屈にも経験にも反している。猟犬の群れの鳴き声は、四十マイルの行程を終えた後でも馬を出発直後のように奮い立たせる。そこでそのまま狩りに移っても、最初のうちは体力や氣勢の落ち込みをほとんど感じないが、きつい一日の終わりには、前半の疲労がそのまま響き、かえって早くばててしまう。私自身の経験を振り返ってみても、猟銃を携えて長く歩き、獲物が得られなかった日は、帰宅時に強い不快を覚える

一方で、ほぼ同じ距離でも獵果のあつた日は元氣な状態で戻ることがあつた。ただし、帰宅時の差は顕著でも、翌朝にはその差は消えており、獵果のあつた翌日の方が四肢のこわばりや足の痛みが軽いと感じることはなかった。

こうした事例について、精神的な刺激は肉体的疲労そのものを打ち消すのではなく、その自覚から注意をそらしているにすぎない。もし精神の活力が本当に身体の疲れを打ち消す力をもつのなら、翌朝には疲れが残らないはずであるし、獵犬に追い立てられる興奮が旅の疲れを実際に克服するのであれば、四十マイル走った馬が、走らなかつたときより余計に疲れるはずはない。いま、この文章を執筆しながら、私はひどい歯痛に悩まされている。着想に熱中しているときには、わずかな間だけ痛みを忘れられるが、痛みを生み出す過程はその間も進み続け、それを脳に伝える神経は、その固有の振動を維持するための注意と余裕を、やはり要求し続けている。別種の多数の振動は、痛みの信号の侵入を妨げるか、侵入しても一時的に抑え込むにとどまるが、やがて、並はずれて強い痛みの一撃が他の振動を一気に打ち砕き、論理的な着想の明晰さを奪い、脳内を支配するようになる。結局のところ、心には障害や苦痛そのものを打ち消したり治したりする力はほとんどなく、強い興奮が生じたときに限って、注意を別の対象へと一時的に

固定できるだけなのである。

ただし、健全で活力に満ちた精神が、身体も同じように健やかに保とうとする傾向をまったく持たないわけではない。精神と身体は緊密に結びつき、本来は互いに助け合う関係にある。それでも、おそらく多くの場合、精神が身体に与える影響よりも、身体が精神に及ぼす影響の方が大きいと考えられる。精神の第一の役割は、身体の欲求に応える世話係であり、必要なものを調達する役回りでもある。こうした欲求が満たされると、活動的な精神はさらに歩みを進め、学問の領域を歩き、想像の世界を巡り、まるで現世の肉体という殻を脱ぎ捨てて、本来の姿を求めるかのように振る舞う。だが、その試みは寓話に出てくる鬼の無駄走りのようなものだ。歩みの遅い亀、すなわち身体は、精神がどれほど広く遠くへ駆けようとも、必ず追いついてくる。たとえ最も明晰で精力に富む知性であっても、一、二度はその呼びかけにしぶしぶ応じるのがせいぜいで、やがて飢えに脳の主導権を譲るか、疲れた身体とともに眠りに落ちてしまう。

たとえば身体を不死にする薬が見つかったとしても、そこに心の不死が伴わないのではないかと心配する必要はない。ただし、その逆に、心が不死だからといって身体まで不死になるわけではない。むしろ、過度の精神的エネルギーは体力を著しく消耗させ、つ

いには身体を損なうおそれがある。節度あるおだやかな緊張や活力は健康に資する一方で、度を越した知的努力や極端な知的負荷は、しばしば指摘されるように、かえって身体という器を摩耗させる。心が身体を制する力から人間の不死の可能性や確からしさを導き出そうとして、ゴドウィン氏が挙げた多くの事例は、この後者に属する。そうした種類の刺激を持続させれば、不死に近づくどころか人体を急速に損なう方向に働き、かえって早く滅びを迎えることになる。

ゴドウィン氏は、人間は意志によって動物的な身体機能をどこまで統御できるようにするかを論じ、その結論として、ごく一部の人は、ほとんどの人には不可能な領域にまで随意的に制御を及ぼせるようになる」と述べている。しかし、ごく少数の例外にもとづいて、ほぼ普遍的な法則に反する一般論を引き出そうとする議論であり、しかもその例外は、実用的な能力というより、むしろ手品じみた現象にすぎない。発熱時に脈拍を意志の力で自在に整えたという話は聞いたためしがないし、身体の不調や障害を恒常的かつ規則的に矯正し、その結果として寿命を延ばすほどの、はつきりとした進歩を示した人物が実際にいるかどうか、大いに疑わしい。

ゴドウィン氏は「観察の現在の範囲を超えるからといって、それが人間の精神の限界

の外にあると結論づけるのは非哲学的だ」と述べた。これに対し、哲学的推測と預言者ブラザーズ氏の断言とを分ける唯一の違いは、前者が今日までの観察の蓄積から得られた徴候に基づいているのに対し、後者にはいささかの根拠もないという点である。科学の進歩は今後も続き、とりわけ物理学では大きな発見が期待されるが、将来の見通しを過去の経験という土台から切り離してしまった途端、とりわけそれに反する推測であればなおさら、不確実性は際限なく広がり、どの仮説も同じ重みしか持たなくなる。例えば「人間はいずれ前と同じように後ろにも目と手を持つようになる」と言われれば、その利便性は認めつつも、過去の記録にその変化を示す徴候が一つも見当たらないことを、疑う理由として挙げるだろう。これが有効な反論と認められないのなら、すべての推測は横並びとなり、等しく「哲学的」と呼んで差し支えないことになってしまう。これまでの観察の流れに照らしても、地上で人間が不死になる徴候が、人間が四つの目と四つの手を持つようになるとか、樹木が垂直ではなく水平に伸びるようになるといった話よりも確かだとまでは、とても言えない。

世界には、予期も予見もされなかった発見が多くあったという指摘は、事実である。しかし、それらを過去の事実からの類推や徴候にまったく導かれずに言い当てたのだと

すれば、その人は哲学者ではなく先見者、すなわち預言者と呼ぶべきだろう。テーセウスやアキレウスの時代の欧州の人びとが、現代の発見にどれほど驚くだろうかという想像は、論拠にはならない。機械の働きに通じない人びとに、結果の見通しを求めるのは無理だからである。私たちは人間の精神の力を十全に知っているわけではないが、四千年前の人びとに比べれば、この道具についてははるかによく理解している。したがって完全な判断者ではないにせよ、当時よりも、何が手の届く範囲にあり、何がそうでないかを、より確かに言うことができる。腕時計は永久機関と同じくらい古代人を驚かせるだろうが、前者の仕組みは私たちには身近でよく理解されており、後者はこれまで最も鋭い知性の努力をもなおかわし続けてきた。いまでは、当初は無限の改良を約束しているかに見えた発明であつても、多くの場合、その進歩を妨げる要因を見通せるようになっていく。望遠鏡の初期の改良者は、反射鏡の口径や筒の長さを伸ばせば性能も上がると思つただろうが、経験は、視野の狭さや集光の不足、さらには大気の揺らぎまでもが拡大してしまうことが、特大で高倍率の望遠鏡に期待された有益な成果を阻むのだと教えた。知の多くの領域では、人類はほとんど絶えず前進してきた一方で、別の領域では努力が一貫して挫折してきた。この大きな差の理由を古代の人びとが推し量るのは難し

かったが、その後の経験によつてその理由が見通せるようになり、将来何を期待すべきかはともかく、少なくとも何を期待すべきでないかについては、よりよく判断できるようになった。否定的な知見であつても、有益なのである。

睡眠の必要性は、精神というより身体の状態に大きく左右され、知性の向上や心の鍛錬だけでこの顕著な弱点を克服するのは難しい。強い興奮や刺激に乗じて二、三日続けて徹夜することはできても、そのぶん体力は確実に削られていく。やがて健康と体力の衰えが理解力や判断力などの働きを乱し、休息を不要にしようとする無理な試みや過度な努力は、結局のところ実質的な前進をもたらさない。

精神的な活力や慈善的な行いなど、人の性格にはたしかに違いがあるが、それによつて知性が寿命を決定的に延ばす力を持つかどうかを判断できるかといえば、いまだ実証されていない。不死に近づくような結果は、いかなる配慮からも生じておらず、その点に限れば、心への配慮よりも身体への配慮のほうがいくらか有効だと見なされる。規則正しく節度ある飲食と運動を続ける人は、知的探求に深く没頭して一時的に身体の欲求を忘れがちな人より、概して健康である。隠居した市民で、小さな庭の生け垣の縁を朝から手入れし、関心が庭の外にはあまり広がらない人が、同時代屈指の広い知的射程と

明晰な見解を備えた哲学者と同じくらい長生きすることもある。死亡統計に通じた観察者は、女性の平均寿命が男性より長いとはつきり指摘している。女性の知的能力が劣るというのではないが、教育の違いゆえに、精神的な精神労働に駆り立てられる女性が男性ほど多くないことは、認めざるをえない。

事例や類似例を丹念に検討し、数千年にわたる人間の資質や性格の多様さにまで目を配ってみても、知性や理性の働きが寿命に決定的、あるいは明白な影響を及ぼしてきたと断言できる観察や証拠は見当たらない。したがって、人が地上で死を免れないという事実は、もっとも恒常的でほとんど不変といってよい自然法則に匹敵する確からしきをもって確立している。当然ながら、宇宙の創造主がみずからの力を行使すれば、これらの法則は一部であれ全部であれ、突然にせよ段階的にせよ変更されうるだろうが、そのような変化を示す兆しはいまのところ見られない。ゆえに、人の寿命が限りなく、あるいはあらゆる限界を超えて延ばしうると考えるのは、地球の引力が斥力に転じ、石が落下せずにやがて上昇し、いつか地球がより温暖で都合のよい恒星に向かって飛び去ると想定するのに等しく、非合理で非科学的である。

本章で検討したゴドウィン氏の議論は、きわめて美しく魅力的で望ましい情景を描き

出してはいるものの、観察や事実による裏づけに乏しく、現実には根ざさない空想に近い
ため、自然や蓋然性が与えるはずの確からしさや説得力、心に訴える力を欠いている。

議論の締めくくりとして、ゴドウィン氏とコンドルセ氏の唱えた人間寿命無期限延長
説に触れておきたい。これは魂の不死を願う心の顕著な現れと見なせる。両氏は、来世
の永遠の命を約束する啓示宗教も、時代を超えて卓越した知性が示してきた自然宗教の
示唆も退けたが、不死という觀念そのものは人間の心に深くかなっており、自らの理論
からどうしても完全には排除できなかったのである。ところが、もつとも可能性の高い
不死のあり方には執拗に疑いを差し挟みながら、最後には独自の不死觀を持ち出す点で、
両氏の議論は哲学的な妥当性に欠け、視野が狭く偏りが強く、公正さを欠いている。具
体的には、過去から将来の幾千幾百万年にわたってこの世に現れる高德で偉大な精神は
みな無に歸し、地上で同時に存在しうる数を超えないごく少数だけが、最後に不死とい
う栄冠を得るという前提である。もしこれが啓示として語られたなら、宗教に敵対的な
人びと、恐らく両氏自身も、それを幼稚で不合理、貧弱で哀れ、著しく不公正で神にふ
さわしくない妄説だと、容赦なく嘲笑したに違いない。

これらの推測は、懷疑主義がいかに一貫性を欠きうるかを示す、奇妙ではあるが示唆

に富む証拠である。長年にわたる一様な経験に真正面から反する主張を信じることと、どのような事実とも矛盾せず、ただ現在の観察と知識の射程外にあるにすぎない主張を受け入れることは、本質的には別物である。自然はきわめて多様であり、その偉大な力の働きを私たちは日々目にしているのだから、まだ見たことがない、あるいは現時点の知識では見通せない自然の形や作用が多く存在すると考えるのは妥当だろう。霊的な身体が自然の身体から復活するという出来事は、その驚異の度合いからいえば、小麦の粒から芽が出てドングリから櫨が育つ現象と同程度の力の現れにすぎず、ことさら異様でも不可思議でもない。仮に、生育や成長というものを一度も見ることがなく、無生物と成体だけを知っている知的存在を想定してみよう。そこへ別の者がその存在に小麦の粒とドングリの小片を示し、十分な観察と分析をさせたうえで、これらは土に置けば周囲から必要な要素を自ら選び取り、巧みに集めて秩序立て、ほとんど創造に等しい働きによって、元の小さな物質とは似ても似つかぬ美しい形へと成長するのだと説明したとする。私は、その存在がこの主張をすぐには受け入れず、なお逡巡して、より厳格な根拠と確かな証拠、より強い権威を求めるだろうと疑わない。むしろ、世界の一切と自らの存在の原因である強大な存在が、人の死と腐敗に際し、思考の本質を非物質的に、少

なくとも目に見えないかたちで呼び起こし、別の状態でいつそう幸福な生を与えるのだ、という説明のほうを、より受け入れやすいと感じるだろう。

私たちの理解という観点から見れば、後者が不利になる相違点はただ一つしかない。前者の奇跡は私たちが何度目にしてきたが、後者の奇跡はいまだ一度も目撃していない、という点である。この差の大きさは十分に認めなければならない。それでも、啓示という前提を離れて考えるなら、肉のからだから霊のからだへの復活は、私たちには直接観察できない自然の働きの一つと見なすことができ、地上における人間の不死よりは、はるかに起こりやすいと考えられる。地上での不死にはこれまで何の徴候もなく、人類が観察してきたもつとも恒常的で堅固な自然法則の一つに、真正面から反しているからである。

この世の向こうを見通そうとすると、よりどころにできるのは権威と推測、よくて輪郭のはっきりしない感覚くらいのものだ。したがって、過去からの類推という根拠なしに特定の出来事を予期するのは非哲学的だ、という先の指摘と、ここでの主張とは矛盾しない。いったん踏み越えれば誰も戻ってこない境界の向こうについて語るときには、この原則を適用しないほかないが、この世で起こりうる事柄については、健全な哲学の

筋道に照らして、この原則を手放すべきではない。他方で、類推の射程は広い。人間はすでに多くの自然法則を見いだしており、類推は今後も発見が続くことを示している。ただし、類推によっても、第六感のような、現在の観察の延長を完全に踏み越えた新たな精神的能力の獲得まで見通せるわけではない。

種子にそなわる選別・結合・変容の働きは驚くべきものであり、これほど高度な機能があの微細な粒や小さななかからそのものに内在しているとは考えにくい。むしろ、自然の背後にある偉大で全能の神が、そのすべてに力強く関与し、いまでも実際に働いていると考えるほうが妥当であり、哲学的にも筋が通っている。全能の神にとっては、どんぐりの有無にかかわらず櫟を生み育てることは等しくたやすく、種を土に埋めるという準備は、人間の便益のために定められた手続きにすぎない。それは、物質を精神へと目覚めさせるために必要な、さまざまな刺激の一部なのである。世界とは、精神を生み、形づくり、育てる巨大な過程であるという前提は、身近な自然の現象や人間の生の営み、社会の出来事、さらには神が人間に段階的に示してきた啓示とも矛盾せず、むしろよく符合している。さらに、大いなるつぼとでもいふべき巨大な炉からは、形の崩れた不格好な器も多く生まれ、そうした役に立たないものは打ち砕かれて退けられる一方で、

真理や気品、優雅さ、美しさ、愛らしさを備えた器は、よりよい境遇へと運ばれ、偉大な造り手の臨在により近い場所に置かれるのである。

多くの読者が論じるまでもなく荒唐無稽だと見なすに違いない仮説について、長らく考察を重ねてきたことを、ここであらためて断っておく。それがきわめて起こりそうにないうえ、哲学の本旨にも反すると自ら認めるからこそ、公正で率直な検討によって、実際にそうであることを示すのが筋である。初めて聞けばどれほどありえないように見える仮説であっても、有能で独創的な人びとが唱えたものであれば、少なくとも吟味に値する。地上で人間が不死に近いかたちで生き続けうるといふ見解について、提示する根拠が許す範囲でなら、一定の信用を与える用意がある。それを絶対に不可能だと断ずる前に、まずは証拠や兆候を偏りなく精査するのが妥当であり、その検討の結果、人間の寿命を無期限に延ばせるとみなす根拠は、樹木が無期限に高く伸びるとか、ジャガイモが無期限に大きくなるとみなす根拠よりも、むしろ乏しいと結論づけられる。ゴドウィン氏は寿命の無期限延長を一つの仮説として掲げ、その実現を後押しすると見なす材料や兆候をいくつか挙げているが、それらは当然ながら精査されるべきものであり、ここで行ったのも、まさにその検討にほかならない。